

『雑談集』巻4の歌群をめぐる一考察

平川 恵実子*

(平成19年6月13日受付, 平成19年12月14日受理)

A Study of the Group of Songs and Lyrics in the Fourth Book of *Zoutanshu*

HIRAKAWA Emiko*

Zoutanshu, completed in Kagen Year 3 (1305), contains many autobiographical descriptions and self-expressive poems. The Fourth Book in particular has a group of songs and lyrics in its closing section. This paper discusses those poems, thirty-nine in all, including one by another poet. As a whole, they are mostly meditative poems, expressing the author's thoughts and feelings in everyday language rather than literary and ornate, and centering around Buddhist themes. They rarely take up natural objects as subject matters; they mostly dwell upon the author, the people around him and their behavior. Although Muju sought his ideal haven in the solitude of mountains, he actually mixed with common people in the secular world and even in his late years went to and fro between Choboji and Rengeji. He was conscious of his role as mediator who should lead common people to the Buddhist principle, which was his uppermost concern.

Key Words : Muju, *Zoutanshu*, *Syasekishu*, waka, self-descriptive

I. はじめに

無住著『雑談集』⁽¹⁾には歌が74首収載されており、そのうち39首は巻4の「無言ノ言」(pp.145-152)という条の後に続けて歌群形式で収載されている。小島孝之氏⁽²⁾は「他の巻々では述懐歌も法談・説経と一続きのものとして話中に挿入されているのであるから、収載形式の面でもここは特異である」と、これらの歌群が『雑談集』においては異色の収載のされ方をしていることを指摘された。また、「巻4末の39首歌は嘉元3年(1305)雑談集がいったん成立した後、恐らく延慶2年(1309)頃、裏書として加筆されたのではあるまいか^(註1)」と、「無言ノ言」と歌群とが別個のものであることを指摘され、かつ、その歌群は無住晩年のものであると推定された。

無住の著作には『沙石集』『聖財集』『妻鏡』『雑談集』があるが、巻末にこれほどまとまって歌が配置されるのは『雑談集』巻4だけである。この歌群では源三位頼政の1首を除いた38首は総て無住の歌である。

従来、無住の和歌観については『雑談集』ではなく『沙石集』の、特に巻5を中心に研究が進められてきた。巻5には多くの和歌説話や、無住の和歌観を窺うことのできる文言が存在するからである。しかし、無住の自詠歌を数多く収載する『雑談集』によれば、無住の人間像や詠歌観をより深く把握できる。無住の自詠歌については、小林忠雄氏⁽³⁾以来あまり論じられることがなかった

ので、本稿では『雑談集』巻4の巻末の39首の歌群を読み解き、無住という人物の実像とその詠歌の実態を明らかにしてみたい。

II. 源三位頼政と無住の詠歌手法

『雑談集』^(註2)巻4の歌群の冒頭には源三位頼政の歌が引かれている。

源三位頼政 隠題名歌

藤 鞭 桐 火桶 頼政

29五月雨ニ、セ、ノフチフチ、ヲチタギリ、氷魚ケ
サイカニ、ヨリマサルラン

これは下線部に「藤」・「鞭」・「桐」・「火桶」・「頼政」という歌題を詠み込んだ隠し題の歌である。歌意は五月雨によって瀬ごとに淵へ水が落ちたぎっているが、氷魚は今朝はどれほど網代に寄り集まっているだろうかというものである。同話は『今物語』、『源平盛衰記』、長門本『平家物語』、『新拾遺和歌集』などに見える。

例えば、『今物語』⁽⁴⁾13「桐火桶」では次のように描かれている。

宇治のひだりのおとゞの御前に、銀をきりびをけにつませられて、頼政卿の、いまだわかゝりける時、めしありて、「きりびをけとわが名をかくし題にて、歌つかうまつりて、これをたまはれ」とおほせごとありければ、とりもあへず、

*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

宇治川の瀬ゝの白波おちたぎりひをけさいかに
よりまさるらん

とよみたりけり。めでさせ給ひけるとなむ。

宇治の左大臣藤原頼長が頼政に「桐火桶」と「頼政」という2つの歌題を隠し題で詠むよう命じ、頼政がそれに応じ、2つの隠し題ばかりでなく、銀も白波に見立てて鮮やかに詠んでいる。

また、『源平盛衰記』⁵⁾ 卷16「三位入道歌等」では次のようになっている。

大方此頼政ハ、歌ニ於テハ手広者ニゾ被思召ケル。
鳥羽院御時ニ、宇治河・藤鞭・桐火桶・頼政ト四題
ヲ下サセ給、「一首ニ隠シテ進ヨ」ト勅定アリケル
ニ、

宇治川ノセモノ淵々落タギリヒヨケサイカニ寄
マサルラン

ト申タリケレバ、時ノ人々、「我々ハ一ノ題ヲダニモ
一首ニ隠ハユ、シキ大事ナルニ、アマタノ題ヲ程ナ
ク仕タル事、実ニ難有」ト感ジ申ケリ。君モ「イミ
ジク仕タリ」ト叡感有ケリ。

ここでは命じる者が鳥羽院となり、隠し題は、先の2つから「宇治河」・「藤鞭」・「桐火桶」・「頼政」の4つになる。頼政が多く歌題を見事に組み込んだ歌を詠み、人々が感嘆したということが書かれている。

この歌をめぐるのは、作品によって歌題を出した人や歌題の内容に変化があるが、これについて『今物語・隆房集・東斎随筆』補注⁶⁾では、『今物語』が一番自然であり、原話であるとしている。また、『雑談集』所収歌については「セ、ノフチフチ、ヲチタギリ」を誤りであるとし、さらに五月雨と冬の風物詩である氷魚との季節のずれを指摘し、「最も崩れたかたち」であるとしている。このことは無住がこの歌を書き留めた時、傍らに原典を置かず記憶に頼って書いた可能性を示唆している。頼政の歌は『雑談集』巻4の歌群の中では唯一、無住の自詠歌ではないが、無住が記憶していたことや、冒頭に配置されていることから考えると、無住が大いに関心を寄せている歌であったと見なされる。

無住の著作の中に、頼政はもう1箇所登場する。『沙石集』⁷⁾ 5末-2「人の感有る和歌の事」である。

一、そのかみ、興福寺の維摩会の延年の見物したる事侍りに、十月十四日の夕、時雨おびたしかりしが、日の入るほどに、殊に空晴れ、月明らかなりし夜、幸王とやらむ、乙王とやらむ、久しくなりて忘れ侍り、京より下りて侍りし若音、上手にて侍りし、神王など、時に同じつらに中されしやらむ、管絃も和歌の道も心得たると承りしが、せめ歌に、

庭の面はまだかかぬに

と云ひて、歩みまはりしを、頼政卿の歌に、

庭の面はまだかかぬに夕立の空さりげなく澄

める月かな

の歌か、それは夏の歌にてこそあれと耳に立てて聞き侍りし程に、しばし思はせて、

まだかかぬに時雨つる空さりげなく

と云ひたりし、時にとりて優に侍りし事、(略)

これは無住が体験したことを書き記したものである。興福寺の維摩会で舞い手が「庭の面はまだかかぬに」と言うのを聞いた無住は頼政の歌を思い浮かべた。この日は夕方に雨が降ったのだが、頼政の歌は夏の歌であるため、時節に合わない。無住が聞いていると、舞い手は3句目の「夕立を」を「時雨つる」に変えた。この日の状況に応じて本歌を当意即妙に変えたことに無住は感心しているのである。

『雑談集』所収歌は頼政の自詠歌であり、『沙石集』所収歌は頼政の歌を用いて他人が詠んでいるという違いはあるものの、ともに聞き手をうならせる詠歌手法に対する注目が認められる。

無住の自詠歌の中には与えられた元の言葉を巧みに変えたものがある。

常ニ独坐老後ハ人不問訪、心静ナル事ヲ思ヒ
ツマケテ

31アナガチニ尋モイラジ、閑ナル、心ゾ人ハ、ミヨ
シノ、ヲク

吉野は古来、修験の場として知られており、仏法とも密接な関係にある。慈円の『拾玉集』⁸⁾にも詠まれている。

入於深山

2408よしの山おくのすみかをたづねつつ仏のみちは
これよりぞしる

無住はこの歌を踏まえつつ、「ミヨシノ」に心を「見る」という動詞と、「御吉野」という地名を掛け、「山の奥へ入らなくても心は御吉野の奥のような境地になれるのだ」と転じているのである。

また、次のような歌もある。

蓮華寺ニ常ニ栖心ヲ

64世ノ中ノ、濁リニシマヌ、心モチ、蓮ノ華ノ、寺
ニスムカナ

蓮華寺については後述するが、晩年に無住が通っていた寺である。この歌は『古今和歌集』⁹⁾ 巻第3夏歌の僧正遍昭の歌を引いている。

蓮の露を見て、よめる

165 はちす葉のにごりに染まぬ心もてなにかはつゆ
を珠とあざむく

さらにこの『古今和歌集』の歌は『法華経』¹⁰⁾ 巻第5従地湧出品の「不染世間法 如蓮華在水」(世間の法に染まらざること蓮華の水に在るが如し)を踏まえ、蓮を世の中の濁りに染まらない譬えに用いている。無住はこの蓮華寺を和語として読み下し、『古今和歌集』の歌を踏ま

えて、自らの心と実際の居場所とを世俗に染まらない清らかな「スム」(澄む)所として詠んでいるのである。

また、次のような歌もある。

先年閑居ノ山里ニテ之ヲ詠ズ
65聞ヤイカニ、妻ヨブ鹿ノ、音マデモ、皆与実相、
不相違背ト

或人初ノ句ヲ難^{ナンジテ}云。申スニ付テ、此ハ彼ノ宮内卿ノ、名歌ノ「聞ヤイカニ、ウハノソラ」ノ句ヲ取テ侍ル。名歌ノ一二句ヲ取テ、風情カハレルハ、皆古人ノ用処ナルカト思計^{フバカリ}也。但カレヲトラズトモ初ノ句ヲ「誰カ聞ク」トナラステヤ侍ル覽、此ハ心猶々深く侍ル也。

無住のこの鹿の声を詠んだ歌に対し、『古今和歌集』巻第19雑体には、紀淑人の歌がある。

1034秋の野に妻なき鹿の年をへてなぞわが恋のかひよとぞなく

秋の鹿は本来、夫の鹿が妻の鹿を恋慕して鳴くものとして歌の題材になっているが、妻を呼ぶ「かいよ」という鹿の声を無住は「皆与実相、不相違背」(世の中の総てはそのまま真実の姿をしている)と詠む。すなわち、無住が詠んだ歌は、恋の歌から仏法の歌に転じたのである。

この歌は無住が気に入っていたのか、『沙石集』巻5にも収載されている。1句目は伝本によって小異があり、米沢本・梵舜本・内閣文庫本では「聞クヤイカニ」、東大本では「誰モキケ」、慶長十年本では割書に「キクヤイカニ」「タレカキク」の2つを記している。これは、『雑談集』のこの歌の後に書かれた解説にあるように、『新古今和歌集』⁽¹¹⁾の宮内卿の、

1199聞クやいかにうはの空なる風だにも松に音する
ならひありとは

という歌を取って詠んだことに対して、「誰カ聞ク」と訂正されたことの結果であり、無住の歌の師^(註3)の存在が窺われる記述である。

65の歌では本来仏法とは関係のないことばを仏法に結びつけているが、逆に仏法のことばを生活語と掛けて詠んだ歌もある。

38食物ヲ、坐禅ノ床ニヲキタラバ、公案ヨリハ、目
ハサメヌベシ

「公案」とは禅宗における坐禅についての問答である。これを「食わん」と掛け、坐禅をする時の床に食べ物をおいたならば、公案の時よりは目が覚めるはずだと皮肉まじりに詠むのである。読み手は、「公案」ということばの使用法に思わず膝を叩いただろう。無住は詠歌において、このように当意即妙にことばを変幻させてみせるのである。

『雑談集』巻4末尾の39首の冒頭の歌は自詠歌でなく頼政の歌であったが、これには、頼政の歌に学ぼうとし

たところが無住にあったためではないかと思われる。

III. 無住の対世俗和歌

1. 世間の人と無住の和歌

無住は寛元元年(1243)に出家した後、諸寺で修行し、弘長2年(1262)、37歳で尾張国木賀崎にある長母寺の住持となるが、『雑談集』にはその長母寺を舞台にした歌も見られる。

当寺ニ四十余年経廻、因縁尽タルニヤ、万事心
不^{トマラ}留事ヲ詠之

63人ハ不和、寺ハ無縁ニ薪ナシ、木ガサキニコソ、
コリハテニケレ

「木ガサキ」とは長母寺のあった地名と木とを、また「コリ」は住むのに懲りたことと木を樵ることを掛けた諧謔歌となっている。詞書には長母寺に40年余り暮らし、縁がもう尽きたのだろうか、万事につけて心がここに留まらないとし、世間とは離れつつある心境を説明している。この歌に関連する記述が『雑談集』巻3にある。

当時ニ有^ト因縁^ト故歟。相通^ト事四十四年、無縁ノ寺常^ト絶^ト煙、衣鉢・道具之外無^ト資材^ト蓄。世間ノ人ノ心ハ非人ノ如ク思合ヘリ。(p.111)

愚老当国ニ通^ト事、及^ト四十四年ニ。人皆厭怠ノ思^トアルベシ。サレバ、逐^ト年^ト親近スル知音、在家・出家希也。尤モ可^ト然^ト事也。但シ昔ノ因縁ニヤ、芳心ノ人々サスガマ、ニ是アリ。当国ノ因縁未^ト尽^ト歟。(p.120)

無住は43年の間長母寺に止住していたが、「因縁」という語を頻りに用いながら、世間の人との関わりを意識していたことが確認できる。

また、無住は長母寺だけでなく、前項に挙げた64の歌に詠まれた蓮華寺にも通っていたことが『無住国師道跡考』⁽¹²⁾に見られる。

○一説ニ日勢州桑名蓮華寺ニシテ入滅スト。蓋シ平生。長母寺ト蓮華寺ト掛持ニシテ。両処ニ住レシ故ニ此説アル歟。(11丁表)

蓮華寺とは、現在は存在しないが伊勢国桑名にあった寺のことである。無住の伝記である『無住国師道跡考』にも64の歌は引かれているが、それに続けて次のように書いている。

○右ノ書ニテ見レバ木賀崎ニモ飽ハテ、蓮華寺ニ住レシ様ニモ見ルナリ。其時満八十歳ナリ。是ヨリ入滅マデ七年ノ間ハ蓮華寺ニ住レシニヤ。年代遙遠ニシテ記録ナケレバ慥ニシレズ(13丁裏)

『無住国師道跡考』は諦忍という僧によって明和6年(1770)に書かれたため、諦忍自身も記しているように無住生存時から年が隔たっており、注意が必要ではあるが、この記事によると長母寺と蓮華寺とを掛け持ちしたこと

が窺われる。無住は蓮華寺で入滅したとも、長母寺で入滅したとも言われ、入滅の場所が定かでないが、生涯世俗とともにあったことは確かなようである。

無住は蓮華寺の周りの人々についても歌に詠んでいる。

勢妙蓮華寺世間人ノ事、思ツバケテ述懐

35世ノ中ノ、人ノフルマヒ、聞ミルニ、イカデカ本
ノ道ニ入ルベキ

36坐禅誦経、学シカキヨム、人ゾナキ、飲食遊ビ、
色ニノミトム

37坐禅誦経、談義ノ座ニハ、眠ドモ、飲食時ハ、目
ヲサマスカナ

38食物ヲ、坐禅ノ床ニヨキタラバ、公案ヨリハ、目
ハサメヌベシ

39モロトモニ、大乘ナレド、大乘ノ、坐禅ヨリ茶ハ、
目コソサメケレ

大乘ノ茶ト云ハ、玄水也。俗ハ三寸ト云。此ヲ
用レバ、風三寸バカリ身ニ不近云ヘリ。大乘
ノ茶ノ事ハ、嵯峨ノ道観坊ノ因縁也。

まず35では世の中の人の振る舞いを見聞きすると、どうして根本の道(=仏道)に入る事ができようか、と人々の行為に対して厳しい態度を見せる。

36以降では、35にある無住が見聞きした「人ノフルマヒ」について、具体的に述べている。座禅や誦経をしたり、経典を学んだり書き写したりする者はおらず、することといえば飲み、食い、遊び、色を好むばかりだと、目を覆うような有様を描写する。37では、座禅・誦経・談義の座では寝ていても、飲み食いする時は目を覚ますと詠み、仏道修行に怠け、飲食に貪欲であることを言う。38については前項で述べたように、「公案」と「食わん」とを掛け、公案よりも食事の方に関心が向きがちな人々の姿を描いている。さらに39では、同じ「大乘」という名前ではあるが、「大乘の坐禅」より「大乘の茶」の方が目が覚めると、やはり仏法から乖離しがちな人々の姿を描いている。

「大乘の茶」については「嵯峨ノ道観坊ノ因縁」と書かれているが、このことについては『雑談集』巻3「乗戒緩急事」(pp.95-96)に解説されている。

大乘ノ茶ト云事、嵯峨ノ浄金剛院ノ院主、道観房、
浄土宗ノ学生、後嵯峨法皇ノ御帰依ノ僧ト聞シガ、
弟子ノ律僧夏ノ比、為ニ対面ニ来ル事有ケルニ、人ヲ
召シテ、「大乘ノ茶ヲマヒラセヨ」ト云。何物ニヤト
思フ程ニ、打鉢子ニ玄水ヲタブクト入テ来レリ。「ヤ
御房はメセ。梵網経ニハ、『酒ノ器ヲ過セバ、五
百生無手報ヲ得』ト説レタリ。サレドモ道観ハ極楽
ヘ参ズレバ、カタハモノニハヨモナラジ。『大乘善根
界ハ、等シテ無機嫌ノ名。女人及ビ根闕、二乗種不
生』、ト云ヘリ。サレバ根闕ノ身ニハ生レジ。タダメ
セ」ト云ニ、「慎デ言ナシ。イデク」トテ、我三杯

飲テ、弟子ニサス。弟子三杯ノム。「又モテ来レ」ト
テ、又三杯ノミテ、内野ニテ、酔サマシテ、「寺ヘ帰
ラレヨ」ト云。弟子又三杯飲テケリ。

此事ヲ聞侍シヨリ、大乘ノ名モナツカシク覚ヘ侍
ルマニ、多ノ名ノ中ニ、大乘ノ茶ト申ナレタリ。
ヲカシク侍リ。玄水ハ医書ノ中ニ見ヘタル名也。或
ハ僧ノ中ニハ、般若湯トモ云ヘリ。本説ハ不レ知侍
リ。俗ノ中ニハ、三寸ト云ヘリ。是ヲ飲ヌレバ、風
三寸身ニチカヅカズト云ヘリ。寸ヲキト読ム事ハ、
馬ノ四寸五寸ナルヲバ、四寸五寸ト云フ証拠也。

道観房が弟子の律僧と対面した時、酒を「大乘の茶」と呼んでいたことを踏まえて、無住は39の歌を詠んだのである。

歌に詠まれた「坐禅」・「誦経」・「談義」とは、無住が俗人に指南していた時のことを指すと思われる。その時に実際に居眠りをされたり、世俗の関心を引くことができなかつたりしたことは十分考えられることである。35はともかく、36以降の歌からは、無住が周囲の人々を滑稽味を帯びた歌に詠むと同時に、やや自嘲気味な詠みぶりが認められる。

35~39の歌では仏道に結縁しようとしめない世俗の人を半ばあきれたように見ながら諧謔的に詠んでいるが、無住も酒を用いることがあったことが『雑談集』巻3「乗戒緩急事」(p.90)の冒頭で明かされている。

貧道二十八歳ノ時、遁世ノ門ニ入テ、律学及六七年ニ。四十余ノ歳マデ、随分ニ持斎・梵行無退転侍シガ、病縁ニ事ヲ寄せ、懈怠ノ心自然ニ無クシテ正体ニ、薬酒晚餐用之ヲ。

この記述からは、無住が持病を癒すための薬として酒を飲むようになったことを知ることができる。さらに、酒と仏道との関わりを同条(p.96)で次のように説いている。

人身難シ受ケ。以テ酒ヲ資シ身ヲ道行セバ、仏道ノ助縁タルベシ。悪用ハ過可シ有ル。是人ノ過也。酒ニ必シモ過アルベカラズ。

在家信者が守らなければならないとされる五戒(不殺生戒・不偷盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒)において飲酒は戒められているが、無住は酒が悪いのではなく、使い方を誤ることが悪いのだとし、酒を仏道のために用いればかえって助けとなることを説いている。

こうしたことから考えると、35で在家に対する厳しい態度を見せた無住ではあるが、実際のところ、自身も本来戒められているはずの飲酒を独自の解釈によって正当化している。方法を間違えなければ悪を善に転じることができるという解釈に当てはめるならば、坐禅における飲食も仏縁を結ぶ一助になり得る。在家は仏道よりも飲食の方に惹かれていたが、仏道を勧める立場の無住も理由はともあれ酒を用いていることから、35~39の歌は仏道

から乖離しがちな在家の姿を詠みながら、その実、無住自身と大きな隔たりはないという意味を込めた歌であると読める。

先に挙げたが、無住は63の歌では「コリハテニケレ」と詠み、世間の人からは「非人ノ如ク」思われていたと書いている。しかしながら、結局は遁世することなく、生涯世俗と関わっていた。『雑談集』巻3(p.121)には、南都の覚念房が住居を定めず、弘法大師の絵のみを携えて諸寺を廻った後、立派に臨終を遂げたという故事がある。その後次のような感想が述べられている。

先年一度相見仕テ侍シ。愚老モ浦山敷乍^{クラヤマンク}存^シ存^ジ、病体事ト与^レ心相違^ス。

仍テ同法・下部、今ハ定テ厭愈アラムト、心中^シ思ナガラ、無道心ノ故ニ、世ヲモ打ステズシテ侍リ。仏ナラバ、心ニマカセテ入滅モサルベシ。拙ク思ナガラ、世ニマガヒ侍リ。顕ニ付ケ冥ニ付ケ恥ク思ヒ侍リ。

無住は覚念房をうらやましく思いながらも、病のために世俗を捨てることが叶わなかったと述べ、恥じ入っている。無住の考える宗教者の理想は世俗との縁を切り、仏道に邁進することであった。だが、病体ゆえにままたらない無住は、僧という立場で住持する寺の周辺の人々と交わりながらを生活していたのである。

2. 無住の自己抑制の歌

無住は世俗に我が身を置いて実際にあったことを見聞きし、それを『沙石集』のような説話集にまとめたり、『雑談集』の説法の中に組み込んだりした。前項で述べたように、飲酒の事実を『雑談集』巻3で述べるなど、無住と世俗とは近い距離にあったことが窺えるが、他方、無住は自身を律するような歌も詠んでいる。

先年目ノヤマヒニ、ツヤクミエズ、咳病^{カイビヤウ}ニ音枯^{コエ}テ、ツヤクタ、ズ。耳ハ久ク不^レ聞^ク侍^リ候^マハ、ニ、思^ツバケテ

40目モミエズ、耳モキコエズ、音^{コエ}タ、ズ、三^{ミツ}ノ猿^ココソ、タモチヤスケレ

41イハザルト、ミザルキカザル、ヨリモナヲ、不^{ザル}思^ハコソ、タモチガタケレ

不^{ワク}言^ハ不^レ見^レ不^レ聞^ク。見^{ケン}惑^{ワク}易^{カス}断^{キコト}、如^シ破^{ワル}石^シヲ。思^シ惑^{ワク}難^ク断^{ダン}、如^シ藕^ワ絲^シ云云。

42三ノ猿ハ、ヨシヤヲドリモハネモセヨ、不^レ思^ハゾ、ヨクツナグベキ

43三ノ猿ト、思^ハザルダニ、タモチナバ、坐^ゴ禅^ノ時^ノ心^チナルベシ

これらは詞書にあるように、無住が眼病を患い目が見えず、咳病で声が枯れ、耳も長年不自由であったという状況下で詠んだ歌である。40では、目も見えず、耳も聞こえず、声も出せない今は、見ざる、聞かざる、言わざる

の三猿を守ることが簡単だと詠み、身の不調によってかえって良い結果を得たと、不運を幸運に転じている。そして41では、言わない、見ない、聞かないことよりも思わないのが難しいと、三猿に1つ加えている。42では、三猿は好きにさせておいてもいいが、「思は猿」という猿はよく繋いでおくべきだと詠み、4つ目の「思は猿」を重要視する姿勢を見せる。そして43では三猿と「思は猿」さえ保ったとしたら坐禅の時の心境になると、三猿と「思は猿」が総て備わった時を一番良い状態だと詠んでいる。

三猿とは青面金剛童子の三匹の使い猿のことであり、三匹の猿はそれぞれ両手で両目、両耳、口を覆っている⁽¹³⁾。これは仏教で身口意の業⁽¹⁴⁾を戒めるという基本的な考え方に相応するものだと思われる。業とははたらきのことであり、身口意の業とは体に関わるもの(身業)、言語に関わるもの(口業)、意志に関わるもの(意業)の3つである。これらに悪を当てはめたものが十悪で、身における3つの行為(殺生・偷盗・邪淫)、口における4つの行為(妄語・綺語・悪口・両舌)、意における3つの行為(貪欲・瞋恚・愚癡)である。三猿を三業に置き換えてみると、「言は猿」はそのままた口の行為である口業、「見猿」「聞か猿」は体に関わるものであるから身業、そして無住のいう4つ目の「思は猿」が意志にかかわる意業になるだろう。

三猿については『沙石集』5末-11「行基菩薩御歌事」⁽¹⁵⁾にも次のような記述がある。

或人、世ノツネニハ三ノ猿ヲタモツ。道人ハ四猿ヲタモツベシ。其中ニ殊ニタモツベキハ、不^レ思^ハナリト云心ヲヨメル。

イワザルトミザルトキカザル世ニハアリ 思ハザルヲバイマダミヌカナ

若シ、思ハザルヲタモチナバ、三ノ猿ハ、自ラヤスクタモチヌベシ。

これは明確に僧を対象者とする戒めになっている。「思は猿」を重視し、三猿を備えた人はいるが、「思は猿」を備えた人はなかなかいないと、「思は猿」を習得することの難しさを詠んでいる。そして、「思は猿」を習得できたならば、三猿も自ずと備わると解説し、自己抑制することを勧めているのである。自己抑制という点では次の2首も三猿の歌と共通している。

凡夫ノ習

57コトハリハ、サルベケレドモ、ホシカラズ、野^{トコロ}老ノニガク、人ノワロキハ

58アナガチニ、人ヲワロシト、思^ハジヨ、我身モゲニハ、ヨウモナケレバ

57の歌意は、理由はもっともだと思うけれども、山芋の苦いのと意地の悪い人は気に入らないというもので、58は57を受けて、強いて人を悪人だと思うまいよ、そも

そも我が身も無用の存在なのだからというものである。
また、「思は猿」に関連すると見なされる歌には次のものもある。

音訓和歌

66万事^ウ不^{ドク}喜亦不^ク憂 功德黒闇不^{アヒ}相^{ハナレ}離一

67ナニ事モ、ヨロコビズ又、ウレエジヨ、功德黒闇、
アヒハナレネバ

これらの2首は同じことを漢詩と和歌で書いている。功德天と黒闇天についての記述は『沙石集』と『雑談集』に散見している。『雑談集』巻1には「功德黒闇ノ法門、年久ク染^ニ心肝ニ深く信^ズ之^ヲ」(p.49)とあるように、無住の意識の中に常にあった思考の典型であったようだ。功德天と黒闇天については『沙石集』⁽¹⁶⁾ 9-25「先世坊の事」に詳しく書かれている。

涅槃経の中に、譬へを説く事あり。ある人の家の門に、女人来たる。容貌美麗なり。主、「いかなる人ぞ」と問ふに、女人答ふ、「我をば功德天と云ふ。到る所には吉祥・福德のみあり」と云ふ。主、悦びて請じ入る。即ちまた女人来たる。容貌醜陋にして、衣裳汚らはし。「いかなる人ぞ」と問ふに、「我をば黒闇女と云ふ。到る所には不祥・災害のみあり」と云ふ。主、これを聞きて、「速やかに去るべし」と云へば、女人の云はく、「汝、愚痴なり。先の女人は我が姉なり。時の間も離れず。姉を愛せば我をも愛せよ。我を厭はば姉をも厭ふべし」と云ふ。主、内に入りてこの事を問ふに、姉が詞も違はざりければ、二人共に追ひ出だしつ。また連れて、ある人の家に入る。主、この事を聞けども、姉を愛する故に妹をもとどむ。

この事を譬ふるに、生と会とは姉のごとし。死と離とは妹に似たり。生死の理、会離の習ひ、必ず俱なり、生ずる者は必ず死し、会ふ者は必ず離る。

『沙石集』の記事と合わせて66・67の歌を見ると、これらの歌は吉祥、福德、生、会といった喜ばしいことと、不祥、災害、死、離といった憂うべきこととは不可分であることを述べていることがわかる。

また、『雑談集』巻1「自力他力事」(p.47)には67とほとんど同じ歌を配置し、次のように述べている。

サレバアナガチニ、福德ノ他力ヲモ不^{ウレフ}可^レ憂愁^ベカ
ラズ。釈迦ノ代ニハ貧ニシテ道^ヲ得^テ、弥勒ノ代ニハ
富テ悟^リ道^ヲ取意。然レバ貧僧ノ故ニ飢饉ノ事アルト
モ、アナガチニ不^{ウレフ}可^レ憂^フ。

述懐

3何ニ事モヨロコビズ又憂^{ウレフ}ジヨ功德黒闇ツレアル
ケバ

この場合、功德天は富、黒闇天は貧を象徴している。67では、喜んだり憂えたりすることを戒めた理由を「アヒハナレネバ」と、禍福は表裏一体だからと理由づけた。

3では禍福が表裏一体であることを踏まえた上で「ツレアルケバ」と詠んでいる。同じ要素を持っていたとしても、そのことによって幸福になるか不幸になるかは時と場合によるのである。

これに関連して、『雑談集』巻1「自力他力事」(p.48)には次のような歌もある。

我ガタメ善キ人ニモ失有リ。我身ヨリモ重ク覚
へ、又同ジ程ニモ覚レバ、憂モ有レバ、我身ノ
愁^{ウレフ}ノ上ニ、ウチ重テ、イタハシク心苦シ。悪キ
人ハ、愁^{ウレフ}ヘモヨソニ覺テ心ヤスシ。此心ヲ

5我タメニワロキ人コソ善カリケルヨキハ中々ムツ
カシキカナ

親切にしてくれた人に対してはその人の身になって心配してしまうので苦が二重になる。しかし、自分にとって好ましくない人に対しては他人事なので、そのように思わず、かえって心が安らかでいられる。だから、自分にとって好ましくない人こそいい人であり、自分にとって良い人はなかなか難しいものだとして述べている。

功德・黒闇の法門は、貧富、幸不幸を分けるものである。その法門に対して、無住は「何事も喜んだり、憂えたりするまい」という。幸不幸は裏表の関係であり、ともに連れだつて来るものだと考えるからである。「塞翁が馬」の故事のように「吉凶は糾へる縄のごとく」くに訪れるものであり、例え不幸の象徴である黒闇天が訪れても、無住は憂えるまいと意識的に考えるのである。これは無住の心の持ち方である四猿の「思は猿」に相当するものであろう。三猿の戒めと功德・黒闇天の法門は、一見異なるようであるが、その意識的な自己抑制という点では同じ教えということになる。

IV. 無住の述懐歌

1. 月に寄せる述懐

次に、『雑談集』巻4の歌群の中の、月を題材にした歌7首について見ていきたい。

山家^カ月

61山カゲノ、谷ノ庵ハ、ウカリケリ、月ミルホドノ、
ソラゾスクナキ

閑亭^カ月

62独リスム、ヤドコソ月ハ、サビシケレ、必ズ山ノ、
ヨクナラネドモ

61は山家の月について詠んだ歌である。山陰の谷にある庵はつらいことだ、月を見るための空が狭いからと詠む。

62は閑亭の月について詠んだ歌であり、独りで住んでいる宿で見る月は寂しく思える、そこが必ずしも山奥ではないとしてもという歌意である。

この歌は内閣文庫本『沙石集』⁽¹⁷⁾ 巻3の裏書きにも次のように収載されている。

閑亭月

ひとり住宿コソ月ハサヒシケレカナラス山ノヲ
クナラネトモ

八月十五夜^(ママ)ニ、広沢^(ママ)ニテ、歌山^(ママ)タチ和歌^(ママ)会有ケルニ、
範永^(ママ)卿遅参^(ママ)シテ、山家^(ママ)月^(ママ)ヲヨマレタケル歌、

住人^(ママ)無山里^(ママ)秋^(ママ)夜^(ママ)月^(ママ)光^(ママ)リ^(ママ)モサヒシカリケリ
是^(ママ)範永^(ママ)卿^(ママ)山家^(ママ)月^(ママ)名歌也。公任^(ママ)卿是^(ママ)ヲ讚^(ママ)テ、「範永^(ママ)卿^(ママ)和歌^(ママ)骨^(ママ)ヲエタリ」ト云給ヘリ。其^(ママ)家^(ママ)守如^(ママ)思^(ママ)ヘル
カヤ。是^(ママ)ヲ本歌^(ママ)思^(ママ)ヘリ。彼山家^(ママ)ヲひとりサヒシトヨメリ。
是^(ママ)イツクモサビシキハ山家^(ママ)トヨメリ。一度^(ママ)発心^(ママ)スレ
ハ、法界^(ママ)皆道^(ママ)也カ如^(ママ)ク、タ、閑亭^(ママ)ヲシナヘテ深山^(ママ)ナル
ヘシ。述懐^(ママ)ヲカケル、実^(ママ)ニヲココマシ。

範永の歌の初出は『後拾遺和歌集』⁽¹⁸⁾ 秋上である。

広沢の月を見てよめる 藤原範永朝臣

258 すむ人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり

『沙石集』では無住の歌の後に『袋草紙』上巻⁽¹⁹⁾にも収載された説話を記しており、『雑談集』よりもこの歌について詳しい。『沙石集』によると、無住は範永の歌を本歌として62の歌を詠んでいる。両歌とも月を寂しく感じる心境を詠んでいるが、無住はその理由を1人で見るからだと詠み、範永は住む人もない山里にいるからだと詠んだ。「一度発心スレハ、法界皆道也カ如ク」とあるように、発心した無住は俗事には目が向かず、俗にいても山里にいるような心境だったのである。

また、無住は月そのものに自己を投影した歌も詠んでいる。

心月

49 マコトナル、心ノ月ハ、ヲノヅカラ、山ノハモナクテ、イデ入^(ママ)モナシ

50 クモリナキ、心ノ月ハ、昔ヨリ、マチヲシムベキ、山ノハモナシ

49の歌意は、悟りを開いた心境である心月は元々空に出ているものであって、山の端に隠れたり、山に出たり入ったりするものでもないというものである。このことは元々人間は生まれながらに悟りを有しているという本覚思想を表している。50も同様に、曇りのない心月には昔から、出たり入ったりする山の端はないと詠んでいる。

続く51は、達磨が天竺から中国に来て禅宗の祖となったことを詠んだ歌である。

祖師西来ノ意

51 クモリナキ、心ノ月^(ママ)ヅハレニケル、西フク風ニ、雲ハ消ツ、

歌意は、曇りのない心月が晴れたのは、西方の天竺から吹く風で迷いの雲が消えたからだというものである。

その他、月を詠んだ歌には次のものもある。

寄^(ママ)月^(ママ)ニ述懐

59 浦山シ、ヲナジウキ世ニ、メグレドモ、月ハ雲居

ノ、上^(ママ)ヲ行哉

60 モロトモニ、影カタムキテ、ナガムレバ、月モアハレト、我ヲミルラン

59の歌意は、同じ憂き世に廻っているけれども月は雲の上で輝いているのがうらやましいというものである。月が天上にあることに對し、我が身は地上で世俗に交わっていることを呻吟しているのである。60は、自分も余生が短くなった今、月の影が傾くのを眺めると、月の方も私を哀れだと思って見下ろしているだろうというものである。

無住は月に仏性を見⁽²⁰⁾、「閑亭の月」や「心月」という歌題に象徴されるような、悟りの境地を詠むようになり、また、月と我が身を同じ憂き世にある存在として捉えて比較した歌も詠んでいるのである。

2. 晩年の諦観と和歌

『雑談集』巻4の歌群には「述懐」の歌が14首ある。

「述懐」は長治2年(1105)以降に成立した『堀河百首』に登場し、以後、歌題として歌壇に定着する⁽²¹⁾。そして、中世も時代が下ってくると、述懐の歌題は感傷的・詠嘆的な内容だけでなく、自己の思念を述べるものと認識される傾向を持つという⁽²²⁾。

無住が老後にたどり着いた平穏な心境で述懐をしている歌が次に挙げる3首である。

老後ノ述^(ママ)懐

32 皆人ニ、トヲザカリ行、老ガ身ゾ、深キ山辺ニ、入ル心地スル

33 老ラクハ、問来^(ママ)人モ、ナカリケリ、長キ命ゾ、フカキミヤマヘ

34 ヨシサラバ、尋モ入ラジ、ヲノヅカラ、問ハレヌ宿ゾ、ミヨシノハヲク

32では、上の句で老年ゆえに自然と人とのつき合いがなくなったことを述べ、下の句では皆人に遠ざかっていく我が身は深山の辺りに入る心地がするという。他の2首も同様で、訪ねてくる人もない御吉野の奥にいる心境になった無住自身の状況を詠み、それならば山奥へ入る必要もないといっているのである。

これら3首は老いを嘆くというより、老いて世間の人との距離を置くことによって深山にいるような環境になったという、自己の思念を述べたものと捉えることができる。

次の歌は無住の内観を詠んだ歌である。

圭峯^(ママ)禪師ノ云、「以^(ママ)空寂^(ママ)ヲ、為^(ママ)シテ自身^(ママ)ト、勿^(ママ)レ認^(ママ)ムルニ色身^(ママ)ヲ。以^(ママ)シテ靈知^(ママ)ヲ、為^(ママ)シテ自心^(ママ)ト、勿^(ママ)レ認^(ママ)ムルコト 妄想念^(ママ)ヲ。比^(ママ) 則^(ママ) 朝暮^(ママ)、止観^(ママ)修行用心也。私ニ詠^(ママ)之ヲ、

44 ヨシモナク、地水火風ヲ、カリアツメ、我ト思フゾ、クルシカリケル

45ヤソヂマデ、ヨクアツメタル、地ト水ト、火ト風
イツカ、ヌシニカエサン

46ヨシサラバ、モヌケテサラム、ヲシカラズ、ヤソ
ヂニアマル、ウツセミノカラ

47アヤマリニ、影ヲ我ゾト、思ナシテ、マコトノ心、
ワスレテシカナ

48アキラカニ、シヅカナルコソ、マコトニハ、我が
心ナレ、ソノホカハカゲ

詞書に、唐の華嚴五祖の1人である圭峯禅師のことは「空寂を自身とみなし、実体のある己を認めてはならない。智慧を自己の心とみなし、妄想を認めてはならない」とあるが、これは朝晩の止観の修行について用心すべきことである。44～48はそれについて無住が詠んだ歌である。

44は、理由もなく地水火風を駆り集め、それを自己と
思うのは苦しい、本来自己は存在しないのだからという
もの。45は、80歳まで地水火風をよく集めた肉体をいつ
か造化の主に返そうというもの。46は、よし、それなら
ば肉体を脱ぎ捨ててこの世を去ろう、惜しくはない、80
歳以上生きている私は空蟬の抜け殻なのだからというも
の。47は、間違っただけで現実にある肉体を自分だと思
い、仏法の真理を求める真の心を忘れてしまったことよ
うなもの。しかし、前項で述べた通り、「マコトナル、心ノ月」
を詠んだ49・50では、意識的に求めようとせずとも元々
人間に備わっているものであることを詠んでおり、47は
49・50の歌に至る前段階であると思われる。48にもそ
うした考えが反映されており、歌意は、心を澄まして動
じないのが本来の自分の心であり、それ以外は幻影に過
ぎないのだというものである。

44～48は、刊本系統の『沙石集』⁽²³⁾ 4-8「道人執着可捨
事」の末尾にも、次のように収載されている^(注4)。

圭峯ノ言ヲ題ニシテ思ヒツマケ侍リ

ヨシナクモ地水火風ヲカリアツメ我ト思フゾクルシ
カリケル

ヤソヂマデカリアツメタル地ト水ト火ト風イツカヌ
シニカエサン

ヨシサラバモヌケテサラムヲシカラズヤソヂニアマ
ルウツセミノカラ

アヤマリニ影ヲ我ゾト思ヒソメテマコトノ心ワスレ
ハテヌル

アキラカニシヅカナルコソマコトニハ我が心ナレソ
ノホカハカゲ

随分述懐

無住八十三歳

徳治三年⁵五月二十一日

徳治3年(1308)は、延慶2年(1309)の詞書をもつ
『雑談集』の30番歌が詠まれた時より1年前である。無住
は仮のこの世の我を幻影と見なし、真の心を求めること

を『沙石集』と『雑談集』で繰り返し述べている。

無住は晩年に内観した述懐歌を詠んでいるが、こうし
た歌が詠まれた背景には死が近づいたことが影響してい
るだろう。歌群の中に1首、老いを迎えて死を意識する
ようになった頃の歌がある。

紫雲来迎

52松ニサク、池ノ藤波、ミルタビニ、心ニカ、ル紫
ノ雲

阿弥陀が信者の臨終の際に来迎することについての歌
である。池のほとりの松に藤の蔓が巻き付いて、花がな
びき揺れるのを見るたびに、心にかかるのは阿弥陀如来
の来迎の時に現れる紫の雲だというのである。

また、万事を世間の運に任せるのがよいという歌もあ
る。

万事世間^{マカセテウシニ}任レ運アルベキ心地ノ述懐

53我身ヲバ、ツナガヌ船ニ、ナシハテ、西モ東モ、
風ニマカセム

54心ヲバ、水ノゴトクニ、モチナシテ、^{ケタ}方ト^{マロ}円トヲ、
物ニマカセム

55我身ナラ、我が思フニモ、カナハヌニ、人ヲ心ニ
マカセシヤハ

56ヨシサラバ、物ヲ心ニ、マカセジヨ、心ヲ物ニ、
ウチマカセツ、

53は、我が身を舳網が解けた船になぞらえて、西に行
くも東に行くも風に任せようというもの。これは、『雑談
集』巻3「愚老述懐」(p.121)の28「ツナガザル、船ノ如
ニ、身ヲナシテ、西モ東モ、風ニマカセン」に似た歌で
ある。54は、『雑談集』巻3「愚老述懐」(p.121)の27番
歌と同じ歌である。55は、我が身でさえ自分の思うよう
にならないのに、他人を自分の心に任せることができる
はずがないというもの。56も『雑談集』巻3「愚老述懐」
(p.121)の26番歌と同じ歌である。

無住は風に任せたり物に任せたり、自分自身をさえ周
りのものに任せようと言う。これはⅢ-2で取り上げた
四猿の歌に挙げた、総ての物事に執着せず、思いを深く
巡らすことをしないということにも関連する。自分から
何かを求めたならば、その対象物に対する期待が生まれ、
結果の禍福によって心が揺れ動く。無住は禍を憂えない
ことを自らに律してもいたが、ここでは更に進んで万事
を運に任せている。これは何事にも期待をしない諦観の
姿勢である。諦観に至る理由としては身口意の三業を起
こす自己も本来は空寂であり、実体がないからである。
それが無住が晩年にたどり着いた境地なのであろう。

V. おわりに

『雑談集』巻4の歌群は、大きく2つに分けることが
できる。1つは、世俗の人に対する歌であり、諧謔味のある
歌群である。その中には、世俗の人に対するように

もこうにもならないという思いと、それでもしようがないという思いで詠まれた歌が含まれている。2つ目には、無住自身の述懐歌であり、心を澄ませる歌群である。その中には、月に寄せる思いと、万事を自然に任せようという思いで詠まれた歌が含まれている。

これらの歌群を今一度振り返って見ると、晩年になり、長母寺や蓮華寺での生活の間に詠まれたものと見なされ、特に世俗への思いを詠む歌群には、約40年間の長母寺での生活への回顧が込められていると考えていいだろう。

無住は『雑談集』巻8(p.262)で次のように言っている。

雑談ト云ナガラ、法門多ク記^ス之^ヲ。邪正難^シ知^リ。
有智ノ人披覧アラバ、削^{ケツリ}非^{ソヘン}添^シ是^ヲ。初心ノ学人ヲ
教誡スル因縁トシ給フベシ。ヨク用ル時ハ、狂言綺
語ノ誤猶ヲ転ジテ、讚仏乗ノ因、転法輪ノ縁トスル
事ナリ。コレハ私ノ言多シト云ヘドモ、仏語・祖訓
相^ト雜ヘタリ。不^レ及^バトモ、ナドカ導^レ愚^ヲ改^ル迷^ヲ因
縁ナカラムト、心ノ中思マヽニ、病中ニ記^ス之^ヲ。

そもそも和歌は、狂言綺語の戯れではあったが、無住にとっては仏法を修行するための縁となる重要なものと認識されていた。そうした観点から詠んだ自らの歌が散逸し亡失するのは極めて残念なことであった。『雑談集』を読むであろう初学の僧に向けて、仏道修行に和歌が有効であることを示すために、無住は手本として自詠歌を残しておこうとしたのではなかったかと想像されるのである。

一注一

- 延慶二年己酉季春初^ノ比詠^之ヲ
30庭ノ面^ヲノ、サクラハナカバ、スギニケリ、ヤヨヒノソラハ、半バナラヌニ
歌意は、弥生の空はまだ半ばではないのに庭の桜は半ば時期を過ぎてしまったというものである。延慶2年(1309)、無住は84歳であり、『雑談集』脱稿の約3年半後にあたる。無住は『雑談集』を脱稿後に自詠歌を書き加えることもあったようである。ただこの歌は散る桜を詠んだものであり、他の歌とは異質であるため、裏書きだったかもしれない。
- 本稿の引用に際しては旧字体を新字体に直し、特に難解なもの以外は振り仮名を省略した。引用文中の漢数字は漢数字のままとした。下線は総て引用者が施したものである。
- 土屋有里子氏は「無住と宇都宮歌壇」(『古代中世文学論考』5, 新典社, 2001)で、『沙石集』巻5所載の和歌連歌説話には宇都宮宗家ではなく傍流の中堅歌人の活動が見られることや、無住の常陸在住時代ではなく後年常陸へ通うようになってから知ったものであることを述べられ、「無住の和歌的興味を誘引する環境として、常陸を中心とした宇都宮歌壇の一連の活動があっ

たことは、ほぼ間違いない」と指摘されている。

4. 歌の異同は、44は『雑談集』は「ヨシモナク」、『沙石集』が「ヨシナクモ」。45は『雑談集』は「ヨクアツメタル」、『沙石集』が「カリアツメタル」。『雑談集』は「地ト水ト」、『沙石集』は「地^{ツチ}ト水」。46は異同なし。47は『雑談集』は「思ナシテ」、『沙石集』は「思ヒソメテ」。『雑談集』は「ワスレテシカナ」、『沙石集』は「ワスレハテヌル」。48は異同なし。

一参考一

- (1) 山田昭全・三木紀人校注『雑談集』中世の文学, 三弥井書店, 1973。『雑談集』の歌番号は通し番号を私に付したものである。
- (2) 小島孝之「雑談集巻四をめぐる」『国語と国文学』50-5, 1973
- (3) 小林忠雄「新編無住国師歌集」・「無住国師の和歌観と和歌とに就いて」『郷土文化』5-3, 1950
- (4) 久保田淳, 大島貴子, 藤原澄子, 松尾葦江校注『今物語・隆房集・東斎随筆』中世の文学, 三弥井書店, p.132, 1979
- (5) 黒田彰・松尾葦江校注『源平盛衰記』3, 中世の文学, 三弥井書店, pp.118-119, 1994
- (6) 前掲参考(4) p.258
- (7) 小島孝之校注, 新編日本古典文学全集『沙石集』小学館, pp.270-271, 2001(底本は米沢本)
- (8) 新編国歌大観編集委員会監修『新編国歌大観』CD-ROM版, 角川書店, 1996
- (9) 小島憲之, 新井栄蔵校注, 新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店, 1989
- (10) 坂本幸男, 岩本裕訳注『法華経』中, 岩波文庫, pp.318-319, 1964, 1976改版
- (11) 田中裕, 赤瀬信吾校注, 新日本古典文学大系『新古今和歌集』岩波書店, 1992
- (12) 国文学研究資料館蔵マイクロ資料9-28-2〈A〉
- (13) 『日本国語大辞典』第2版, 6, 小学館, 2001
- (14) 中村元ほか編著『岩波仏教辞典』岩波書店1989
- (15) 渡辺綱也校注, 日本古典文学大系『沙石集』岩波書店, pp.258-259, 1966(底本は梵舜本)
- (16) 小島孝之校注, 新編日本古典文学全集『沙石集』小学館, pp.500-501, 2001(底本は米沢本)
- (17) 土屋有里子編著『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』笠間書院, pp.118-119, 2003
- (18) 久保田淳, 平田喜信校注, 新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』岩波書店, 1994
- (19) 藤岡忠美校注, 新日本古典文学大系『袋草紙』岩波書店, p.84, 1995
- (20) 平川恵美子「『十訓抄』から『沙石集』へ一月の記述をめぐる一」『文学研究』94, 2006

- (21) 内田徹「述懐歌の形式」『文芸と批評』6-5,1987
- (22) 稲田利徳「正徹の述懐歌」『中世文学研究』（中四国中世文学研究会編）1, 1975
- (23) 深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引』勉誠社, 1980